

「出会いがもたらすもの」

ヨハネによる福音書 1章19～28節

初めに、少し前、インタビュー記事として新聞に掲載された一文を御紹介したいと思います。
「^{フランス}仏の思想家ルジャンドル氏に聞く」と題した記事で、「自分を組み立てられぬ若者：方向示せぬ大人世代に責任」と副題が付けられていました。

子どもの暴力や若者の犯罪の凶悪化が世界的に深刻な問題になっている。

— 何が起きているのですか。

「多くの若者や子どもたちが自分自身を築きあげる方法を見失っている。人間としての自分を組み立てることができなくなった結果、自己破壊的な状況に追い込まれているのです」

— 次の世代のために、何かできることはないのですか。

「子どもが自分の居場所を見失っている時に、方向を示す地図を教えてやる。あるいは自分が分からなくなった若者に、自分を映す鏡を差し出してやる。それは^{おとな}大人の世代の責任なのです」

— その大人の側も指針を失っているようにもみえますが。

「まさに問題はそこです。荒廃した若者たちは地獄を渡っているけれど、それはまず大人たちの問題なのです」

ルジャンドルさんは、子どもの側の事柄として「自分を組み立てられずにいる」と言われます。つまり、「自分がよく分からないまま、居場所も進むべき方向も見えずに混沌^{こんとん}としていく」、そして、そこから「自分を壊し、自分自身が壊れるような状態に立ち至っていく」と言うわけです。しかも、そのうえで、こう指摘されます。「子どもたちに方向を示す地図を教えてやる必要があり、自分を映す鏡を差し出してやる必要があるにもかかわらず、そうした責任を負っている大人自身がそもそも指針を失っている。そこにこそ、問題の根がある」と。これはまさに、この私たちが今抱えている、いや もっと正確に言えば、私たちがいつの時代にも向き合わねばならない大切な問題のように思われます。それは一つには、「出会いの欠如」と言えるのではないのでしょうか。言葉と行ないとをもって子どもたちに意味ある出会いを提供できない私たち、いわゆる「大人」。自らの生き方をもって子どもに本物の出会いを提供できない大人たちの問題です。そして、「それは、大人たち自身の中にそもそも指針がなく、確かな軸がないからだ」と、ルジャンドルさんはそう語っておられます。的を得た、鋭い指摘のよう

に感じられます。

こんな言葉を聞かれたことはないでしょうか。「太刀打ちできない相手に出会ったことのある人間は謙遜を知っており、不思議と豊かで強くもある」。自分が敵わない人間のいることを知っている人はそこで自分を振り返ることを知っており、生きる指針やより所をそこから学び取っていくからではないでしょうか。と同時に、その一方で「あいつは自意識ばかり強くて、独りで大物ぶってる。薄っぺらで深みのない奴だぜ。本物を知らないんだな、本物を」といった、そんな言葉を耳にすることもあります。「貧しい独り善がり」とでも言いましょうか。自分自身、時にそんな落とし穴にはまりかけてしまうこともあるので、「要注意！」と言いつけています。たしかに、本物に出会った人、自分を超越る存在に出会った人は豊かにされ、強くされるように思います。どこでどう生きるべきか、立つべき場所と進むべき方向をそこで教えられるからでしょう。逆に言えば、そうした出会いのない人は自分の小さな世界から出られず、自己満足の籠の中で鳴き続けることになるのかもしれませんが。結局、まずもって自分自身が本物の出会いによって豊かにされること。子どもたちとの出会いも、そこからしか始まらないように思われます。

ただし、「生きる指針」と言い「生きるより所」と言っても、必ずしもこむずかしい言葉を並べ立てる必要もないように思います。「生きる」とは本来、単純であって、しかも深いものではないでしょうか。児童文学者に灰谷健次郎という方がおられますが、ファンの方もいらっしゃるかもしれません。すでに12年前に亡くなられましたが、小学校の教師を経て、児童文学の作家に転身。『鬼の眼』や『太陽の子』といった作品が評判になりました。生涯を通し子どもの教育や人権に深い関心を寄せられた方で、御自身、思いを同じくする仲間と共に「太陽の子保育園」という園を立ち上げられてもいます。そんな灰谷さんの著作の一つで、次のような手紙が紹介されていました。

その手紙は、わたしたちのやっている太陽の子保育園にとどいた。

— 私は只今二十五歳で、通信制の短大に在籍しており、昼間は・・・事務員をしています。・・・私は、人間不信のまま、流されて高校生になりましたが、入学してたった三ヶ月で退学するに至りました。・・・それが決定的になったのは六月下旬のことでした。私は、バレー部に入部致しましたので、早朝練習や夕方遅くまで練習しておりました。ある日、同じ部員の子の夏用の新品のブラウスがなくなりました。そして部活の担当教師や、各学年の主任教師までがきて、全員総検を受けましたが、みつからなかったのです。別室で話し合いがあり、終了後解散したのですが、定期券を出すためにバッグを開けたら、入っている筈のないブラウスが入っていて、周囲からどろぼう扱いを受け、翌日から停学処分になりました。何故？ 私は何もしていないのに、どうして？ と毎日考え悩みました。両親も信じてくれず、追い詰められた私は、自らの存在を否定することで身の潔白を証明しようと思い、睡眠薬を九六錠買って飲むことに致しました。・・・九六錠薬を飲んだとき、何も想い残すこともなく、十五年人間をやって

疲れ切ってしまったなあ、と感じました。

そして、今回、事件を起こし、受刑者生活を送った日々は、絶望も、屈辱も、悲しみも、苦悩もイヤという程、味わい、本当に死んでしまおうと考えました。そんな時『わたしの出会った子どもたち』を読ませて頂いたのです。あの本を読み終えて、人間は何かの力によって（神というのでしょうか）生かされているのかもしれない。それは、きっと その人にしかできない使命があるからではないだろうか。だとしたら、それを全うせねばならないのではないかと考えるようになりました。生きる力を与えられました。・・・勉強嫌いだっただ私が、生まれて初めて、先生と呼べる方である灰谷先生に出逢えたおかげで、今、大変ですが通信制の短大で学んでいられます。・・・私は、灰谷先生にお逢いできて本当に嬉しいです。生きていてよかったですと思います。・・・灰谷先生は、「宮城教育大学の学長でいらした」林先生のことを「ぼくのはじめて出会った人間だった」と仰言いましたが、私のはじめて出会った人間は灰谷先生です。

私も、本当にいい人になりたいです。自分の中に自分以外の人に住んでもらいたいと願います。といっても、弱くバカな私ですから、きっと沢山失敗や苦しむと思いますが自己から逃げるのはよそうと思います。・・・過去を持ち続ける私を、生き返らせて下さった灰谷先生に心から感謝致します。

ここには、出会いの豊かさと力強さが生き生きと語られています。読み手を意識した作為の美辞麗句や難解な飾り言葉はどこにもありません。あるのは素朴で単純な、正直で真つすぐな告白です。生き方そのものに関わる、いのちそのものに結び付いた言葉で溢れています。出会いは私たちに豊かにし、強くしてくれます。私たちを大きくしてくれます。本物であればあるほど、真実であればあるほど、深いものであればあるほど、出会いは私たちに生きたいのちを注ぎ込みます。大きな人に出会う、大いなる者を知る。そのとき、私たちは自分を開かれ、新たないのちに導き入れられるのではないのでしょうか。狭く内向きな殻からに閉じ籠もらない。貧しい自分で良しとしない。自己満足わなの罫を知る。そして、意味ある 生き生きしたいのちを見出す。今 求められているのは、まぎしくこうした生き方のように思われます。

今月の箇所は、「ヨハネによる福音書」が前回までの「序言」から「本文」に移行する、その最初の部分です。ヨハネによる福音書は すでに序言で触れたバプテスマのヨハネ—新共同訳聖書は小見出しで「洗礼者ヨハネ」と表現しているが、ここでは従来の呼び方に従い、「バプテスマのヨハネ」と呼ぶことにしたい—を改めて正式に登場させ、そのヨハネにイエス・キリストを紹介させることから始めます。それはほかでもない、イエス・キリストに出会ったヨハネの告白にほかなりません。そこに見るのは、人間同士の出会いをはるかに超えた、いのちの深みを貫く出会いです。今月はその前段に当たります。「出会い」の観点から、その御言葉みことばに聴いていきたいと思います。

事は「エルサレムのユダヤ人たちが、祭司やレビ人たちをヨハネのもとへ遣わした」(19) ことから起こりました。「あなたは、どなたですか」(同) と、^{えたい} 得体の知れない不審な人物 バプテスマのヨハネを^{ただ} 問い質し、その正体を特定するためです。ここで遣わされたのは、「サンヒドリン」というユダヤの最高法院から派遣された一団とみられます。ローマ帝国の治世下、ユダヤの宗教的最高議会として、国内の様々な事柄を管理した部門です。いわば、ユダヤ社会の体制を象徴するものと言えるでしょう。

実は、ユダヤは当時、エルサレムの救いを待ち望む空気で満ちていました(ルカ 2:38 参照)。祖国の解放を切望する祈りです。すでに90年近くもローマ帝国の属領とされ、祖国を踏みにじられていたからです。人々の間には、旧約聖書に約束された「救い主」の到来を心待ちにする熱い思いが^{あふ} 溢れていました。実際、メシアを偽証する者が起こり、革命を企てること^{ひんぱつ} が頻発したとも言われています。そんななか、バプテスマのヨハネが現われたのでした。マタイ、ルカの両福音書は記します。「エルサレムとユダヤ全土から、また、ヨルダン川沿いの地方一帯から、人々がヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で彼から^{バプテスマ} 洗礼を受けた」(マタイ 3:5~6)。「民衆はメシアを待ち望んでいて、ヨハネについて、もしかしたら彼がメシアではないかと、皆 心の中で考えていた」(ルカ 3:15)

しかし、バプテスマのヨハネのこうした^{うわさ} 噂を耳にして、心穏やかでないのは当局です。新興の宗教運動について、詳細な調査を開始します。ユダヤの指導者たちは、人々の動きに敏感でした。不測の事態が生じ、ローマの介入を招くことを恐れたからです。そして、あと一つ。彼らの保身とプライドが許しません。「^{おれ} 俺たちを差し置いて、神の名を語る^{やつ} 奴がいる。とんでもない奴だ。こと宗教に関しては、俺たち以外に専門家や権威がいてはならぬ。ヨハネは民衆に危険な思想を植え付けかねない。早めに何とかせねば・・・」

そんな当局から遣わされた者たちが、尋ねたのでした。「あなたは、どなたですか」(19) 「あなたはエリヤですか」(21) 「あなたは、あの預言者なのですか」(同)。それに対し、ヨハネは答えます。「わたしはメシアではない」(20) 「違う」(21) 「そうではない」(同)。その言葉は、この上なく簡潔で明快です。

「メシア」とは元来、「油注がれた者」を意味しました。旧約時代、王は油を注がれて即位しました。「油を注ぐ」とは、神の働きのために特別に選び分かつことです。こうした背景のもと、旧約聖書は、神はしかるべき時に 御自身の特別な使いを世界に送られると語り続けました。それは他の者たちと同列の使いではなく、比類のない油注がれた者、すなわち「究極的な救い主」でした。人々の救いのため、神の器として決定的な務めを果たす人物です。

「エリヤ」とは、旧約聖書が「見よ、わたしは大いなる恐るべき主の日が来る前に 預言者エリヤをあなたたちに遣わす」(マラキ 3:23) と告げた、その預言者エリヤです。伝統的な律法によれば、物やお金など 持ち主の不明な財産をめぐって所有が争われている場合、その判断はエリヤが来るまで待たねばならぬとされていたといえます。ユダヤ人はそれほど、エリヤの再来を信じていたのでした。実際、バプテスマのヨハネの^{ようぼう} 容貌はエリヤのそれとよく似ていました。旧

約・新約 両聖書を読み比べると、エリヤは「^{けごるも}毛衣を着て、腰には^{かわおび}革帯を締めていた」(列王記下 1:8)とあり、ヨハネもまた「らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締めていた」(マルコ 1:6)とあります。しかも、語る内容まで同じ「悔い改め」の説教ときには、ヨハネの内にエリヤの再来を見ても不思議はありません。

そして、「あの預言者」とは、いつの日か起こされるとされていた「モーセのような預言者」を指していました。旧約聖書に「わたしは彼らのために、同胞の中からあなたのような〔すなわち、モーセのような〕預言者を立てて その口にわたしの言葉を授ける」(申命記 18:18)と語られている、その預言者です。

しかしながら、ヨハネの答えは当局の担当者たちを困惑させるものでした。「自分はそのどれでもない」と言うのです。バプテスマのヨハネの返答を見ると、その目がどこに向けられているか見て取れはしないでしょうか。ヨハネは、自分自身について語りません。イエス・キリストを指し示すことこそ、^{みづか}自らの使命と考えていました。第1の問いに答えて、ヨハネは「公言して隠さず・・・言い表した」と20節に記されています。が、これはいささか奇麗に過ぎる訳で、この部分は一つ前の口語訳のほうが原文のニュアンスを伝えていると言えます。口語訳では、こうなっています。「彼は告白して^{ホーモロゲーセン}否まず・・・告白した^{カイ} (*ὡμολόγησεν καὶ οὐκ ἤρνήσατο, καὶ*^{ホーモロゲーセン} *ὡμολόγησεν*)」。「告白して」「否まず」「告白した」。どう見ても奇麗とは言いがたい、くどくてしつこい言い回しです。けれども、福音書の著者はあえて、こうしたゴツゴツした表現を当てたのではないのでしょうか。「ヨハネはヨハネであって、救い主ではない」。ヨハネの告白の核心たる その一点を明確にするためです。

3つの問いに対する ヨハネの3つの答えも、正確にはこういう順序になります。「わたしはメシア^{エゴウーク}ではない (*ἐγὼ οὐκ εἰμὶ ὁ χριστός*)」「そうではない (*οὐκ εἰμὶ*)」「違う (*οὐ*)」。返答は、しだいに短く、きっぱりとしたものになっていきます。ヨハネの目はキリストに向けられており、人々の目がそのキリストから^そ逸れて 自分に向けられることを避けようとしたのでした。自分を見せようとする自己顕示欲は、内に占めるキリストの大きさが増すにつれ、溶かされて小さくされていくように思います。

^{ちまた}巷の笑い話ですが、とはいえ、こんな笑えない話を目にしたことがあります。

時は、第2次世界大戦。連合軍に一人の優秀なパイロットがいました。飛行機乗りとしては、^{いちもく}誰もが一目を置く^{うでき}腕利きでした。しかし、その一方で、名うての問題児としても知られていました。手柄自慢で、自分のことしか眼中になく、仲間とうまくいかないのです。そんな彼が他の部隊に異動したとき、指揮官から異動先に一つの申し送りがあったといいます。彼についての申し送りでした。そこには、こう記されていました。「卓越した戦闘員。ただし、高度5,000フィート限定。地上に降ろすなかれ」

腕利きの飛行機乗りだが、けれども、地上に降りるやのべつ幕なし 高度5,000フィートの手柄話

ばかり、というわけです。要するに、「たまったもんじゃない。そんな奴はずっと飛んでてもらって、地上に降りてくれないほうがいいわ」ということなのでしょう。人より上にいたい、人の称賛を得たい。誰しも、拭い切れない思いではないでしょうか。時には、腰の低さや情の深ささえ、称賛を得る道具にしかねないのが人間です。人との比較が気になってしかたありません。

バプテスマのヨハネは、それとは逆の人物でした。自分を低くすることにおいて謙虚であり、キリストを指し示し、証しすることにおいて大胆な人でした。聖書に「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」（ローマ 12：15）とありますが、実際、不幸を悲しむことならまだしも、人の成功や称賛を共に喜ぶということは嫉妬深い私たちにとって容易なことではありません。逆に言えば、自分より優れた人物を「優れた者」と認めて受け入れ、そこから物事を学べる人は本当の意味で謙虚であり、かつ豊かで強い人と言えるように思います。バプテスマのヨハネはまさに、そのような人間だったのではないのでしょうか。

質問をことごとく否定されたエルサレムからの使いは ついに、業を煮やして尋ねます。22節、「それではいったい、だれなのです。わたしたちを遣わした人々に返事をしなければなりません。あなたは自分を何だと言うのですか」。そう問われて、ヨハネは初めて、自分の口で自分の何たるかを明かします。23節、「わたしは 荒れ野で叫ぶ声である。『主の道をまっすぐにせよ』と」。旧約聖書のイザヤ書 40章3節からの引用です。

かつて、ユダヤの民は国を失い、新バビロニア王国の首都 バビロンに連れていかれました。イザヤ書 40章3節は、その捕囚からの解放を告げる預言者の言葉です。そこで言う「捕囚」とは もちろん、バビロンにおける囚われのことです。ですが、その後5世紀以上を経た福音書の時代にバプテスマのヨハネがこの言葉を引用した背景には、また別の意味合いがあったのは言うまでもありません。それは、当時のユダヤ社会の状況でした。当時、ユダヤの宗教は形骸化し、内に漲るものが薄れていました。信仰は人に見せる外面的な飾りのようになり、自己顕示欲や物質欲が広がっていました。中身の希薄なものになっていたのです。バプテスマのヨハネがイザヤ書を引用して指摘したのは、人間の この本質的な囚われでした。ヨハネは、その囚われから解放されて「荒れ野」に出てゆくことを説いたのです。そして、言います。「自分はそこで『主の道をまっすぐにせよ』と叫ぶ声である」と。「荒れ野」とは、この世の物質的な、また形式的なより所がない場所です。つまり、目に見える「人間的なより所」がない場所です。しかし、ヨハネは「そこに出てこい」と言います。なぜなら、そこで初めて、本当に頼むべきものが何であるかを示されるからです。本当に信頼しうるものは何であるのか。それを、そこで示されるからです。「荒れ野」とは、外なる囚われから解き放たれて「内なる希望」を与えられる場所です。恵みの場所です。今日、私たちは外側の生活ばかりに心を奪われ、なくても済む物を抱え込み、不自由で身動きできなくなっているのではないのでしょうか。持つことでなく、持たないことで見えてくることもあります。むしろ、本当に大切なものはそこにこそ隠されているように思われます。内なる本質的な事柄に目を開かれるからです。

このように、バプテスマのヨハネは一貫して「自分は救い主でもなければ、偉大な預言者でもない」と答えました。その告白は どころよりも、26節、27節の言葉に凝縮されています。26節、27節、「あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる。その人はわたしの後から来られる方で、わたしはその履物のひもを解く資格もない」

ヨハネは言います。「わたしは その履物のひもを解く資格もない」。これがどれほど徹底した告白であるか、21世紀の日本に住む私たちには、言葉を追うだけではなかなか理解できません。今日でも、パレスチナの道は熱く、埃っぽいものとなっています。2000年前には なおのこと、そうだったにちがひありません。そうした道を歩けば 当然ながら、足は熱くなり、埃だらけで臭くなります。このため、知人や友人の訪問を受けたとき、家の者は第一に 足を洗う水を用意するのが習わしになっていました。とはいえ、通常は 家の者が実際に足を洗うわけではなく、それは奴隷の役割とされていました。一方、律法の教師は当然の働きとして 弟子たちに聖書を教えはしたものの、その代償としてお金を取ることはしませんでした。神の言葉を教えてお金を取るなど、恐れ多いこととされたからです。が、律法の教師として、生活があります。朝から晩まで働き、同時に充分 勉強の時間を確保するなど、いかに優秀な教師であっても そうそうできることではありません。何らかの仕方生活上の必要を満たさなければなりません。そこで登場するのが 弟子たちです。日常的なあれこれを 教師に代わって弟子たちが行なうのでした。そうすることで、生活上の細々した務めから教師を解放し、聖書の研究に打ち込めるようにしたのでした。ところが、こうしたことと関連し、内輪の申し合わせとして 次のように言われてもいました。すなわち、「弟子は教師のため、奴隷が主人にする務めの一切を行なうものとする。ただし、履き物の紐を解くことはこのかぎりでない」と。神の教師であっても、ユダヤの道を歩けば、足は汚れ、蒸れて臭くなります。「一切を行なう」というのであれば、その足から履き物を脱がせ、足を洗うのが道理というものです。でも、「それだけはしなくていい」というのです。あまりに酷だからです。「何でもします。でも、それだけは御勤弁願います」。弟子たちのそんな声が聞こえてくるようです。バプテスマのヨハネの言葉は、ここから発せられたものです。そして、言います。「わたしは その履物のひもを解く資格もない」。つまり、「イエス・キリストの前に出るとき、私は奴隷にも満たないことを知っている」。それが、ヨハネの告白でした。人間同士の比較でなら、それなりに言えもする。しかし、イエス・キリストの前に立つとき、自分がいかに貧しく、いかに足りない存在か。ヨハネは そのことを知っていたのでした。

こうしてヨハネは、イエス・キリストを指し示して言います。「あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる」。実際、主イエスについて学びはしても、出会いのない知識で終わる人も少なくありません。教養の知識にとどまって、自分自身の生き方を左右するような そうした深い出会いに至る人は必ずしも多いとは言えません。イエス・キリストはユダヤの普通の人々の中で育ちました。イエスという人間がいることは、少なくとも故郷の人々は知っていたはずで、顔も姿格好も、生い立ちも暮らしぶりも知っていたはずで、にもかかわらず ヨハネは、「あなたがた

わたしの心に・・・

の中には、あなたがたの知らない方がおられる」と言うのです。知識としてあれこれを知ると、その人そのものに出会うのとは違います。イエス・キリストに出会うというのは、^{みずか}自らの生き方を左右するお方として、すなわち自分の人生をその御手に預けて生きる、そこに深い信頼を置く「いのちの主」として出会うということではないでしょうか。

何事につけ、出会う人と出会わない人がいます。私たちは、おつき合いの習い性^{ならしゅう}でしょうか、なにかにつけ「いろいろと教えられました」と、聞き慣れたお礼の言葉を言い交わします。いわゆる常套文句^{じょうとうもんく}の一つかもしれません。ですが、教えられても何一つ変わらず、教えられたことを生きないなら、そこに真の出会いはないのではないのでしょうか。この点に関連し、冒頭の女性の手紙にもその名前が出てきた林竹二^{はやしたけじ}という先生が的確な言葉を残してくれています。すでに故人とされましたが、かつて宮城教育大学で学長を務められた方です。私の私淑^{ししゆく}する大切な先生です。林先生は旧制中学のとき、学校で出会った教師から多大な影響を受け、キリスト教会で洗礼を受けられました。山形県の新庄中学時代のことです。その思いは、卒業後、牧師になろうと神学部に進むことも考えられたほどでした。実際、卒業後、東北学院に進学し、神学部の学生たちと寮生活を共にされた時期もありました。その後、様々な経緯があり、形としては教会から離れるものの、生涯キリスト教の信仰に目を向け続けられた方でした。その林先生の言葉とは、次のようなものです。

一片の知識が学習の成果であるならば、それは何も学ばないでしまったことではないか。学んだこと^{あか}の証しはただ一つで、何かが変わることである。

林先生は、「学んだこと^{あか}の証しはただ一つで、何かが変わることである」と言われました。そして、この言葉に答え、冒頭の女性はこう記すのです。

林先生は、「学んだこと^{あかし}のたった一つの証しは変わるることである」と言われました。私も変わる^{ため}為に努めます。生まれて初めて、学んだことを生かします。

「出会い」とは、自分を超越する存在と向き合い、その相手に^{みずか}自らを変えてもらうことではないでしょうか。今いるよりも高いところに引き上げてもらうことです。また、今いるよりも深いところに踏み込ませてもらうことです。もちろん、人と人との出会いもあります。私たちは、そこからも多くを受けることができます。けれども、イエス・キリストのもたらす出会いは、人間同士のそれを超えた深さに私たちを導いてくれる。豊かで強い深みへと導き入れてくれるように思います。バプテスマのヨハネの告白はまさに、その証し^{あか}と言えはしないでしょうか。

実は、ヨハネが主イエスに実際に会うのは、次回の29節以下においてです。しかし、ヨハネは旧約聖書の預言を信じるその信仰においてすでに救い主を望み見、これに出会っていたのでした。そして、よくよく注意しないと気づかずに見過ごしてしまうのですが、このことのうちにあと一つ、とても大切な事柄が示されているように思われるのです。それは、バプテスマのヨハネが、肉の目で主イエ

スを見る以前に、つまり 主イエスを実際に目で見ないうちから すでにこれに出会い、これを信じたということです。ヨハネはイエス・キリストを^{なま}生で見なくても、(旧約) 聖書と預言者たちの信仰の言葉によって 主イエスに出会ったのでした。だとしたら、この私たちにも同じことが言えるのではないのでしょうか。21世紀に生きる私たちは もはや、イエス・キリストを肉の目で見ることができません。主イエスに^{なま}生でお会いすることはできない。けれども、私たちの前にも同じように、聖書があります。ヨハネの時と同じように、信仰者たちの言葉があります。それらと、^{ひとごと}他人の評論家然としてではなく、自分自身の体重をかけて真剣に向き合うとき、同じように「出会い」が起きてくる。起こされてくる。生ける主イエスが出会いを引き起こしてくださるのではないのでしょうか。自分以上のものとの、またお方との出会いを求める誠実な求道者に、イエス・キリストは豊かないのちをもって出会ってくださるにちがひありません。深みを貫くそんな出会いを、私は知りたいと願っています。

私たちは、どんな質の、どんな深さの出会いを求めるのでしょうか。私は、心の奥底の深いところに語りかけ、この自分を根っこから突き動かす、そんな出会いを求めたいと思います。ヨハネによる福音書は、7節後の35節から21章25節のその終わりまで、主イエスの言葉と業とを具体的に記します。それは、保身やエゴとは無縁の、ただひたすら神の愛を生き抜かれたお方の姿でした。私たちがそこで神様の真実に出会い、いのちの確かなより所^{みいだ}を見出すためです。

終わりに、お体に障^いが持たれた一人の先生の一文を御紹介して、この拙文を閉じさせていただきたいと思います。「お身体^{からだ}がご不自由なのに・・・」と題された証しの一節です。

本当の出会い「その人自身」に関わることから始まります。片手が不自由な人に対して「真ん中に立ちなさい」・・・と促がされたイエスは、彼を遠巻きにして見ただけで彼自身に出会おうとしない多くの人々に憤りをおぼえられました。私は機会ある毎に「障^いがい者である私」に出会うのではなく、私自身と出会って欲しい、そして交わって欲しいと言いつづけています。こんなことを言わなくても、呼吸するように自然な^やかたちで健常者と障^いがい者が共生できる日が一日も早く来るようにと願って止まない私です。

いわゆる「障^いがい」を持たれた方々に対する先入観を正される一文ですが、出会いの本質に触れた証しでもあるのではないのでしょうか。イエス・キリストは私たちを遠巻きにして見ただけのお方ではありません。自ら^{みづか}進んで、私たちに出会ってくださいます。そして、外側のあれこれを問題にされることなく、私たち自身に、人間的な飾りを取り去った私たちそのものに関わってくださいます。私たちを真つすぐ、丸ごと受け止め、生かしてくださいます。私たちは、その^{まなざ}眼差しのなか、神様から許された^{いのち}生命を生きています。「わたしの目に あなたは^{あたい}高く、^{とうと}貴く、わたしはあなたを愛する」(イザヤ 43:4) と、神様からその存在を喜ばれ、赦され、生かされている^{いのち}生命です。

わたしの心に・・・

その恵みを感謝し、主イエスとの出会いを日ごとに深めながら生きてゆきたいと願います。そして、教会もまた、互いの丸ごとを受け止め合い、真実な出会いを交わし合える場とされますようにと、そのように願い、祈らされています。

〔祈り〕

愛する神様。

今日、世界はかつてないほどに人々で溢れ、物で溢れ、情報で溢れています。これほど豊かな時代がどこにあったでしょうか。しかし、私たちは依然として、満たされません。多くの人に囲まれながら、多くの物を手にしながら、また多くの情報をやり取りしながら、なおもどこかで「本当に大切な何か欠けている」と感じています。

神様。人の多さ、物の多さ、情報の多さに反比例するように内なる貧しさを深めるこのとき、聖書の御言葉を通して私たちに語りかけ、御子イエス・キリストにおいて 私たちに真実な出会いを起こしてくださいように。私たちの内に揺るぎないより所を与え、豊かで確かな歩みに導いてください。いま一度、あなたに目を向け直したいと思います。心を熱くして御心を尋ね求める者とさせてください。

いつの時も どうか、私たちに伴い立ち、傍らにいて共に歩んでくださいますように。

主の御名によって願い、お祈りいたします。

アーメン